<table>
<tr><td colspan="3">団体名</td><td>とおの昔話　語り部　いろり火の会　(岩手県遠野市)</td></tr>
<tr><td rowspan="4">団体の概要</td><td colspan="2">活動開始年</td><td>西暦　2000 年　2 月　活動開始</td></tr>
<tr><td rowspan="2">メンバー</td><td>人数</td><td>＜役員数＞　3 名　＜事務局スタッフ数＞　2 名
＜ボランティア数＞　20 名</td></tr>
<tr><td>構成</td><td>主婦が中心</td></tr>
<tr><td colspan="2">予算規模</td><td>平成１３年度概算
･収入　\640,280 (商工会より弁当代と交通費の助成金)
･支出　\640,280</td></tr>
<tr><td colspan="3">団体の目的</td><td>･遠野に昔より語り継がれる言葉の文化を次世代に正しく楽しく継承すること (口承伝承)
･とおの昔話の語り部になること</td></tr>
</table>

①ボランティア活動の概要

観光客や地元住民を対象に、遠野に残る昔話を語る語り部としてのボランティア活動を行っている。駅横の物産センターの一室を無償で使用させてもらっており、そこに常駐して、希望者に昔話をしている。このほかに、ケアホームに月１回出かけて行って、入居している高齢者に昔話を語っている。

平成 13 年８月の夏休み期間中には 830 人、９月には 720 人の観光客や地元住民に活動を行った。観光客には、「遠野の昔話を聞いて、民話のふるさと・遠野に来たという実感をもった」と好評である。

②ボランティア活動を立ち上げた経緯

遠野市は遠野昔話の語り部の育成を目的として、平成８年に「語り部教室」を開講した。幼い頃に耳で聞いた話をより確実なものとしたいという思いを持った人々が「語り部教室」に集い、柳田國男の「遠野物語」を読んだり、先輩語り部の語りを聞いたりして勉強を行った。

４～５年ほど勉強を続けるうちに、自分達の発表の場がほしいと思い、その場所を探すこととなった。その頃、遠野市で中心市街地活性化事業が実施されていることを知り、商工会に相談したところ、駅近くの商店街の空き店舗を活用して「語り部の居る休み処」を準備してもらえることになった。ここを拠点に、平成 12 年２月に、語り部教室の修了生 21 名が「とおの　昔話　語り部　いろり火の会」を立ち上げ、語り部としてのボランティア活動を開始した。中心市街地活性化事業の一環として、商工会から場所代、弁当代、交通費を補助してもらいながらのスタートであった。

商工会からの支援は平成 12 年３月末までの期間限定であったが、語り部のボランティア

活動は観光客や地元住民に好評を博し、継続を望む声が強くなった。このため、会員が会費を出し合い、これまで無償であった「語り部の居る休み処」を自分達の力で借りることにした。この経験が、いろり火の会のメンバー間の結束を高めることになった。

しかし、メンバーだけで活動拠点の賃料を支払っていくことが難しくなり、市商工観光課に相談にいった。市ではいろり火の会の活動を評価しており、市が所有する駅横の物産センター内の一室に活動場所を確保してもらうこととなった。いろり火の会がこの場所の管理委託を受ける形で無償で利用できるようになったのである。現在２名のメンバーが常駐して活動を行っている。

③ボランティア活動に役立てているスキルの向上の工夫

いろり火の会のメンバーは、より多くの昔話をより正しく口で伝えていくことを目標に、文献を読んだり、先輩からスキルの伝授を受けたりしながら、勉強を重ねている。また、同じ地域にある NPO 法人遠野物語研究所が開いている昔話教室を受講したり、そこで語りの講師を務めたりしている。

④ボランティア活動を行う上での困難点や課題

メンバーは主婦であるので、毎日２名が活動拠点に常駐することが大変である。しかし、語る楽しさと観光客との出会いの楽しさを心の糧として、都合の調整を行っている。

現在のところ、活動拠点以外の場所で出前で語りをするメンバーは１名だけである。今後は、会員全員が語りの出前に応じられるようにし、日本中に遠野の昔話を届けたい。

＜物産センター内観光案内所での活動風景＞http://www2.ocn.ne.jp/~tmkenkyu/iroribi/iroribi.htm

（団体代表者によるレポート、団体代表者へのヒアリング調査、団体資料より作成）

＜事例のポイント①＞　スキルの発表の場としてのボランティア活動

行政機関、社会福祉協議会、地域のボランティアセンターやボランティア協会などが人材育成のための研修や講座を開設しており、ここで知識や技術を取得した人々が、実践的な活動を行おうと考えてボランティア活動に踏み出す場合がある。この事例でも、このような構図がみられ、ボランティア活動が始まる重要なきっかけとなっている。

＜事例のポイント②＞　拠点を得て活動が成り立つ

語り部としての活動には、誰もが気軽に立ち寄れる活動拠点が不可欠であり、いろり火の会のメンバーも活動を立ち上げるにあたって、最初に場所探しを行っている。このように、活動の内容によっては、活動拠点を得ることではじめて成り立つものもある。いろり火の会では、中心市街地活性化事業が行われているという街の動向をキャッチし、商工会の協力を得ることに成功して活動を立ち上げた。活動場所を提供したり、あるいは場所探しの力になってくれそうな団体や人に関する情報提供は重要な支援である。

＜事例のポイント③＞　スキルを維持向上する工夫

いろり火の会では、日常的に語り部としてのスキル向上の努力を行っている。そのために、地域のより専門的なスキルをもった団体（NPO 法人遠野物語研究所）と連携するなどの工夫を行っている。

＜事例のポイント④＞　主婦特有の活動上の悩みにも前向きに対応

いろり火の会のメンバーは主婦であり、ボランティア活動に割く時間をつくり出すことに苦労をしている。これは、専業主婦がボランティア活動を行う際によく聞かれる悩みである。いろり火の会のメンバーは、ボランティア活動を通じて得られる楽しさや達成感を糧に家族の理解を得る努力をしているものと考えられる。いろり火の会の活動が地域のために役立っていることが評価される機会があると、家族や周囲の人々の理解も得やすくなっていくことであろう。